

一人の女子がスポーツ店で購入した 大きめの浮き輪と 水着

ある女子のリミカはランニングがてら
たまたま途中休憩のような感じで店を巡
る。

ランニングはずっと続けている日常。そのため余裕たっぷり、途中駅にいろいろ下車しているというイメージで途中に立ち寄るのだ。

時にはソフトクリーム・・・・・・・・。

舐めながら、リミカはホットパンツの太

ももをムッチムチ自慢で触る。

時には買いたいものがあるってホームセンターに立ち寄ることもある。

先日は夏前の夕方・・・・・・・・涼しくていつも通り余裕があったので、走っていた

歩道前のガラス戸に貼られた壁紙がふと気になってスポーツ用品店に立ち寄った。

わりと近くにはあったが行ったことのない小さなスポーツ店である。

夏になれば浜辺・・・・・・・・。

水着の肌色太もものイメージが頭の中に直感的に浮かんだ。

リミカはそこへ立ち寄ったついでに水着が買いたくなる・・・・・・・・。

腰辺りがウズウズしてきた。

・・・・・・・・狭い店内。ガラス戸の外は暗くなってきた。

店外（みせそと）の歩道からちょっと草むら川辺の方へ進めば、

熟女、男子女子にかかわらず入浴できて
そのまま真っ白下着で朝までハダカで
いられるラブホテルが立っている。

7階建てである。

・・・そしてリミカもやっぱりまぶし
くて暑い太陽の夏の浜辺の下、浮き輪で

沖の方まで泳いでいきたいと思っていた。

太ももは・・・・・・・・店に並べられていた青っぽい水着と相性がよくてお尻は今でも快樂への期待に震えている。

リミカは直感で思った。

白い水着で丸いゴムボールが浮かぶ沖
辺りまで泳いでいけるはずだ・・・・。

砂に付いた水着・・・・水着の腰ひもを
触る。

少し薄めの・・・・かすかに色がついた
水着。とにかく真っ白である。

気がつけばリミカは海にいた。

ゴムボールの下はとても深い。昼間はとことん泳いで途中で海の家のかき氷を食べたりする……。

その浜辺水着は現実である。

……だけどスポーツ店から幻のようであった。少し長めの距離をバスに乗っ

て着いた海は思っていたよりも浜辺が
白い。

まだ静けさのある誰もいない海辺。浜辺
の東の方は工事がしてあるようで赤い
コーンと停車したシャベルカーが置か
れている。

少し乗り遅れた・・・水着のプロの世

界というか・・・。

揺れる腰つきでリミカの隣には女子二人がいた。

二人とも腰の白い水着に手をかける。

そして後ろのコンクリート階段をふり返った。

夏に行った列車での一人旅の記憶がなんとなく蘇る。

しかしちゃんと隣には乱交のラブホテ

ルがある。

(体験版は以上になります。ご読了ありがとうございました)